

2010年2月2日

京都新聞、夕刊  
2面

# 現代のことは

やまだ  
山田 玲子



日本人女性と結婚した外国人研究者は幸せだときく。彼女たちは、欧米の女性に比べて家庭サービスを要求しない。夫が深夜や休日まで働いてもあまり不満をいわない。その結果、夫は研究に没頭でき、成果も上がる。しかし、これは同僚の奥さん連中（欧米の女性たち）には評判が悪いぞうだ。自分たちの夫が「悪習」にそまって、家庭サービスを軽視し、帰宅時間が遅くなるからである。彼女たちにとって、家庭サービスの時間を

割いてまで仕事をして成果をあげていくのは「抜け駆け」以外の何物でもないのだから。一方、女性の立場からみると、外国人と結婚した日本人女性研究者も悪くない。特に欧米の男性は、妻に家事の一切合財をおしつけるということはない。場合によっては、レディファーストの習慣で、ファイファイ・ファイティ以上の分担をしてくれることもある。知己の米国人同士の研究者夫妻の場合、夫は力仕事、妻は料理洗濯という一応の

## 研究と家事の両立

分担はあるが、どう見ても夫の負担が重そうなのに、妻の研究の手伝いもしている（させられていない）。私の友人の日本人女性研究者は、米国人研究者と結婚している。この夫は、妻が出張に出かける前には早めに帰宅し、洗濯やアイロンがけをして妻の出張準備を手伝ってくれてるぞうだ。妻の方は夜中まで研究室で学会発表の準備に没頭している。

私のツレアイは日本人で研究者であるが、我が家では米国方式を採用している。私は年代のわりには古風な環境で育ったように思う。結婚した頃は、女性は男性に仕えるものだという感覚を持っていた。しかし、結婚後数年経って、転機が訪れた。ツレアイが米国へ単身赴任したのだ。ツレアイは、米国の習慣

に触れ、家庭サービスの重要性を体験的に理解したようである。私はいえ、その間、子供と2人の生活を心からエンジョイしていた。自分の都合だけで日々の暮らしを設計し、実行していくことは楽しく、「夫に仕える」という感覚は都合よく忘れてしまった。こうして、ツレアイの帰国後、我が家は自然と米国方式になじんでいった。ツレアイは、妻子を日本において出かけたことがトラウマになつていたようで、それも家庭サービスへの意欲に拍車をかけたようだ。私も歳とともに厚かましさが増し、いつの間にか家事全般をすべてツレアイにまかせられるようになった。最近では、ツレアイに先立たれたら一人で暮らしていけるか心配になってきたほどだ。

（ATRAリーディングテクノロジ―会長）

女性の方が元気であるとか、人生と真剣に向き合っているとかいう人もいる。しかし、女性だからとか、男性だからと考えること自体、時代にそぐわない。家庭も職場も、それぞれが小さな社会である。それぞれの場で、出来る者が出来るだけのことをするというのが基本的な姿勢と、苦勞を全員で分かち合う気持ちがあればよいと思う。仕事と家事の両立のしかたは、その結果に過ぎないと考えてはどうだろうか。

大切なことは、性別や職の有無に関係なく家族全員が力を合わせることだ。5人家族の場合、家族全員で力を合わせれば苦勞は5分の1になり、喜びは5倍になる。間違いない。